

平成30年7月1日発行 専修/第73巻第7号(毎月1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

# 春燈

2018 July

7  
月号



主宰の句

安立公彦

沖を向く灯台ひとつ春は逝く

夏立つや身馴れ衣の紺さやに

麦秋や動かぬ塔の影まぶし

母の日の珈琲独り淹れてをり

朔太郎忌山脈みどり揃ひけり



# 成瀬櫻桃子の句

## 遠蛙嫂が問ふ湯の加減

「素心」昭和五十六年

物心つかぬ時に兄弟離ればなれになって了った先生。長じてからの兄との再会。家族の交際も出来る様に。今日は出張で京都へ行った帰ります。酒好きの兄にと、伏見の酒を土産に一年振りに故郷を訪れました。風呂を上がると嫂の心尽しの酒の宛。兄も上機嫌です。いける口の姉さんも加わって、楽しい小宴に。遠蛙の声も賑やかに、四方山話が夜更けまで。

懸林喜代次

成瀬櫻桃子の句

蚕豆やひかりみなぎる安房の国

「素心」昭和五十六年

二月のある日、千葉の白浜へ花摘みに出かけた。光あふるる安房の海、畑には蚕豆の花が今を盛りと咲き、夏が今にも来そうな感じだったことを思い出す。

かつて吟行句会に通っていた頃何か、櫻桃子先生のお墓におまいりさせていただいた。

圓勝寺の立派な門を入るとその奥に、成瀬家の墓所がありその一角は深山のような静寂につつまれていた。

石橋 邦子

# 燈下集



○ 呂 秀 文

雁歸る行きも帰りもフリーパス  
体調の崩れにも似て牡丹散る  
逆算の日々大切や涅槃西風  
過去忘れ未来にかける春一番  
コスモスや風のタクトは一辺倒

○ 陳 妹 蓉

もどかしきぎつちよ矯正亀鳴けり  
肩書にこだはる疲れ四月馬鹿  
さりげなき虚言の効き目四月馬鹿  
背伸びして優雅に装ふ四月馬鹿  
母校いま日本遺留の花万朶

○ 井 上 正 子

三楹の花日を三方に弾かせて  
葉桜や遠来の客声高に  
逝く春や「とはずがたり」を遅々と読む  
直面の舞の若さや敦盛草  
釣釜の揺れに偲ぶや妣の点前

昭和の日学徒動員遠くなり  
昭和の日学徒の爆死偲びけり  
夏近し和服モダンな洋服に  
母の日や亡き子を偲ぶ子守唄  
麦の秋リハビリ効果現れて

○ 三代川玲子

相寄りて光太郎忌の花筏

狛犬に白狐の面輪新樹光

にはとこの花や古墳の一基二基

矢車のカラカラまはる榎の垣

はつ夏の音たかく振る神籤筒

○ 豊谷青峰

風光る友禪染の伸子張

蓬摘む母に似て来し姉妹

行く春や草にかくれし水の音

入院の三日の留守や桐の花

新門辰五郎寄進の鳥居青葉風

○ 高埜良子

人待つや春日集むる大提灯（浅草四句）

仲見世を目印と掲ぐあたたけし

浅草は先師の縁街うらら

風眩し真向かふ句碑のちらし書き

篝火や雨音消ゆる夜桜能

○ 吉川隆

網を干す夕爾の里や桜鯛

魚市の裸電球さくら鯛

花筏八百八町抜けて海

ヤッホーと返すヤッホー青き踏む

古民家の空の青さや鯉幟

○ 本田保

春雷やゴルゴダの丘処刑場

浮かびたる句を忘れぬる臃かな

あたたかや笑顔拍手で迎へ呉れ

東京つ子見た事も無い田螺かな

明易しはや街灯の消されけり

○ 瀬戸峰子

若葉風心に鳥語あそばせて

さりげなく物言ふ人や若葉光

体育館の弾くる声や若葉映ゆ

楷若葉藩校門も開かれて

どの窓も光眩しき若葉風

○ 今井弘雄

木洩れ日の風透き通る若楓

一病を息災として菖蒲酒

柱のきずなくて育ちし子供の日

山の端に落暉の残る春の暮

風五月青の喝采生れけり

○ 清水美子

源流の光を乗せて花筏

花くづの命終の嵩光増す

新説の二足歩行や花粉症

顔と名の一致せぬ日やしやぼん玉

源流に降るさくら薬さくら薬

○ 片山博介

一着と走者天指す仏生会

蜷の道果ては羅馬へ通ずべし

浜風に島のオラシヨを聞く臍

連歌はや恋の句出でぬ春障子

春愁や妻の蒐めし虚の箱

○ 宮沢治子

柳の芽野川の風に育ちけり

多摩川の光る流れや花大根

中華街の小さき交番春灯す

ひとり来て仲見世に春惜しみけり

婚六十年即かず離れず風薫る

○ 府川昭子

開くにも散るにも花に心寄す

すぐそこに雨の来てゐる初音かな

縁側の窓から見ゆる巣箱かな

四十雀の子育てぶりに脱帽す

前山の近づいてくる柏餅

○ 永島雅子

彼岸詣「昇進」供ふる墓前かな(甥大学教授に昇格)

彼岸詣済ませ竹馬の友と会ふ

花水木白が闌けゐる煉瓦壁

手繋ぐや遠足の列の赤白帽

墓参後は地場の筍づくしかな

# 余言

## 安立公彦

成らぬ恋胸に重たし鳥雲に

片桐てい女

「恋」を辞書に当たるところある。「一緒に生活出来ない人や亡くなった人に強くひかれて切なく思うこと、またそのところ」。そのあとに「特に男女間の思慕の情」とある。今は後者の解釈にウエートが置かれすぎている。

この句、正に「恋」の本質を詠んでいる。「成らぬ恋」も「胸に重たし」も故人となった人への思いだろう。「鳥雲に」が良く上五中七を支えている。春燈長老のひとりとしての、風格ある一句である。

お下がりのセーラー服や種案山子

小林のり人

「種案山子」は、苗代に蒔いた種初を鳥に啄まれない為に立てる案山子。作者の住まいは長岡市寺泊。種案山子の

立っている苗代も諸方にある。

その種案山子がお下がりのセーラー服とあるのが絶妙だ。これでは雀も近寄れまい。広い苗代に微笑むかのように立つセーラー服の案山子は、まさに晩春の風物詩である。

ふらここの一人は空へ漕ぎゆけり

三上 程子

「ふらここ」が「ぶらんこ（ポルトガル語）」ということによく知られている。しかし「ふらここ」という語には多分に現実離れた幻影らしきものが感じられる。

この句、「一人は空へ漕ぎゆけり」は、まさにその幻影の成せる思いと言えよう。これは目前の事実ではない。対象となる「一人は空へ」は彼岸のかなた。この「一人」に作者の深い思いが感じられる。個性ある作品だ。

花ぐもり夕鐘川面流れゆく

小張 志げ

この「夕鐘」は浅草にある金竜山浅草寺であり、川面は隅田川の景だろう。浅草寺の創建は西暦六二八年とあるから、今を去る一三九〇年前のこと。隅田川から示現した観音像を祀ったのが始まりと言う。「花ぐもり」が如何にも隅田川だ。「夕鐘川面流れゆく」は、江戸の昔からの風情だろう。隅田川の夕景が整った形で詠まれている。

賽銭の清けき音や春深し

林 紀夫

「清けき音」が善い。賽銭は神仏に奉る錢。元来は祈願成就のお札に奉る賽物だったのだらう。それがいつしか賽銭となり現在に到っている。

神社に詣でるとまず賽銭箱に硬貨を入れる。作者は今、その硬貨の触れ合う音色に「清けき」を感じる。それは自身、「このころの清けさ」あつてのこと。それを受けて、「春深し」の思いが、參詣のころを充たすのである。

標なき空を一途に鳥帰る

大文字孝一

「鳥帰る」は、秋日本に渡つて来て越冬した鳥が、春になつて北方の地に帰ること、逆に「渡り鳥」は、越冬地から日本に渡つて来る鳥。これらのことは歳時記の示す通りである。「渡り鳥」には何とはなしの孤高の思いが、「鳥帰る」には惜別の思いがするのは個人的な感情か。

この句、「標なき空」は引鳥を仰ぐ人の思いで、鳥には「一途に」定めた標の空があるのだ。この地を後にする引鳥の群れを、愛憐の思いで仰ぐ作者の姿が見えてくる。

惜春の旅の衣を畳みけり

小山 繁子

四月本部句会で特選に戴いた句の一つ。

言葉の選択が善い。ほのかな感傷も惜春の季語にふさわしい。注目すべきは上五の「の」。これは上五で段落をつける軽い「の」であり、同時に「旅の衣」と一体化すべき

「の」でもある。それを「畳みけり」という作者の動きで終わらせたのも効果的だ。この「けり」は作者の軽い動きを助けている。一句を通して惜春の思いが善く出ている。

晩年の父のノートや鳥雲に

渡辺 若菜

この句、四月本部句会で特々選に戴いた。選評を記す。「晩年の父のノートがどういう内容か、句を見る人には分からない。しかし繰返し読む内に父のノートが独立して考えられるように感じられる。それは父のノートへの思いが句を見る人夫々の父への思いを呼び起こすからだ。厳格な中にも優しさのある父だったのだらう。ノートが活きている」。この思いは今も変わらない。「鳥雲に」も的確だ。

意のままに髪を操る春の風

赤岡 茂子

一句の調べが軽やかだ。「意のままに髪を操る」は、春の風を擬人化したもの。しかも作者は、その擬人化された「春の風」と「己」が「このころを」通わせている。擬人化もこまてくると、不自然さが全く感じられない。それは一句の調べの軽やかさも作用していると言えよう。

作者の俳句は常に生活と共にある。八年久に開きし箏箏の着尺V。同時発表の句。「年久に」など久し振りに聞く。総じて言葉の扱いが善い。

# 当月集

安立 公彦選



○ 平沢恵子

杖のひとのかるき会釈や風光る

紋白蝶しづかな日向つくりをり

春禽や音楽堂の屋根の錆(白比叟)

春深しまぶた閉ぢたる檻の鱈

落椿裏返るまま庭暮るる

○ 持田信子

地図のなき旅のはじまり花筏

桃咲くや異国語混じる授粉どき

保育児の黄色いこゑや風光る

沢風や誰も無口に野蒜摘む

好奇心まだありつくね芋植うる

○ 川崎雅子

山陽道彩る紅や山つつじ

抹茶もて春をもてなす道の駅

仁和寺の桜は八重に盛りかな

花むしろ留まる刻もなかりけり

カメラ持ち花見の列の抄らず

○ 石原節子

癒えきらぬ吾が身いとほし五月来る

ベランダの紫蘭の風に吹かれをり

水脈並べカヌー過ぎゆく立夏かな

若葉風木洩れ日あそぶ川原みち

あぢさゐの毬まだ小さき川原ゆく

○ 佐藤玲子

身に余る事がわが身に春風

舞ひながら二ひら三ひら紫木蓮

満月と落花の舞を存分に

まかり出る蟄の寿命を問うて見る

些かの庭なりでで虫潜みをり

# 春燈の句

安立 公彦選

ヅル街の楠の神木五月来る (太田姫稲荷神社)

東京 近藤 真啓

スランプとは思はぬ暢気緑さす

満たされて若葉こぼるる日差しかな

糊利きし白衣眩しき立夏かな

そして誰も居なくなりたり花は葉に

埼玉 中里よし子

地に跳ねてなにを探すや雀の子

燕のすがたなき空仰ぐいくたびも

実梅こつと落ちて孤独を深めけり

物の芽に音なき雨の霏かな

鳥根 土江 比露

掛樋を走る水音春田打つ

搭乘や風のなびかす春シヨール

娘が炊きし玉筋魚届く夕の卓

咎めだてする人も無き朝寝かな

七曜の華やぎ終へし花の道

大阪 中上 頽子

一畝の花豌豆の豊かなる

梵鐘の余韻に春を惜しみけり

とりどりの野菜苗植糸土に老ゆ

チューリップ日がな燥ぐや夕惑ひ

雑草の勢ひ著き夏は来ぬ

波蹴つて飛魚散らすひかりかな

風光る新会員は二十代 (タイ圍俳句会)

四月馬鹿その手に乗らぬ妻なりけり

春愁や米寿近づき食細る

初夏の味に憧れタイ住み十余年

春の庭雀一家のミーティング

春なれや山のみどりも深まりて

うぐひすの鳴き音に目覚む鄙暮し

春宵や気の向くままに小買物

千葉 大湊 栄子

広島 浅田セツ子

